

邊りには灯の付いた家も見えない、桑畑らしかった。

大根畑の間に小道がついてゐる。

俺は地球の外へでも墜落した人間か何ぞの様に、トボくと歩き出した。
段々山の端が薄ら明るくなる時分だった。

雪は解けてゐたから、

夜露に濡れた植物共は、大地と共に、晝間の雑巾をも欲しがつてゐた。

二三丁行くと廣い通りに出た。

俺は右せんか左せんかと迷つた。

結局東京の方角を志した。

向ふから馬の蹄の音がする。

雨が少しバラ／＼した。

夜隠にあたつて、何事だらうと俺は思つた。

馬上の男の風體は皆目解らなかつた。